【以善会レポート】

以善会は、毎月第二、第四土曜日の午前に松ヶ岡に集まり、松ヶ岡に関わる歴史、建築などについて勉強し、資料整理を行ったり報告会（「松ヶ岡ものがたり」）を開催しているボランティア・グループです。このたび掛川市の『Ｗｅｂ版松ヶ岡』に「以善会レポート」として、勉強の成果を随時載せていただくことになりました。

メンバーは現在十人程度で、会費・規約などはない自由な集りです。歴史分野だけでみても近世（掛川藩政、儒学、商業・金融など）、近代（地方政治、金融、地主制など）のさまざまな研究課題がありますので、研究したい方や勉強したい方など、ぜひのぞいてみてください。

以善会という名称は、山崎家の住宅あるいは書斎を「以善堂」と称したことにちなみます。レポートの第一弾として、「以善堂」という名称の由来についての考察を掲載させていただきます。

なお、「以善会レポート」は、会としての見解を発表するものではなく、それぞれの筆者の見方であり、文責は筆者にあります。

「以善堂」の由来

中山正清

一、「以善堂」とは

江戸時代に豪商として栄えた山崎家の第四代当主である万右衛門（晨園、一七七四～一八二九年）は学問にも深い関心を寄せ、儒者で掛川藩校教授を勤めた松崎慊堂（一七七一～一八四四）とも親交を結びました。晨園という号が、朱子学を大成した朱熹（一一三〇～一二〇〇年）の詩「澆花」にちなんでいることは、慊堂が記した「晨園記」に記されています。

では、以善堂とは何でしょうか。松ヶ岡所蔵の「義人之正路也」と書いた扁額には「戊子　以善堂主人書」と記されています。戊子は文政十一年（一八二八）で、晨園の晩年のものです。これと同筆とみられる「夫仁者天之尊爵也人之安宅也」の扁額にも「以善堂主人書」とあります。これによって、晨園が自邸またはその書斎を以善堂と称したことがわかります。

晨園の頃は山崎家の邸宅は掛川城下の西町にありました。その後、六代

目万右衛門の時代に現在の西南郷の地に移転したのですが、移転した後もやはり「以善堂」と称していたと考えられます。

明治七年（一八七四）に掛川の三原屋清助が「以善堂聚珍」つまり以善堂が収集した書籍のうち『名数課童編』（曽我廻渓著）を出版しています。また、関西大学図書館所蔵の『以善堂蔵書目録』の表紙には「山崎晨園」と記されていて多くの儒学関係の書籍が載っていますが、『報徳記』『西洋事情』『静岡県誌』など明らかに晨園の死去以降の書籍の名前も多くみられますから、晨園の蔵書を中心にそれ以降の山崎家の蔵書も合わせた目録ということになります。

このほか、書家の日下部鳴鶴（一九三八～一九二二年）が甲申（明治十七年）に書いた「白水能清得月寄」で始まる漢詩には「以善堂主人一粲」（以善堂主人が白い歯を見せて笑う）の句があります。明治十七年（一八八四）といえば山崎家の当主は千三郎であり、ここに詠まれた「以善堂主人」は千三郎と考えていいでしょう。

このように、「以善堂」の名前は明治時代になっても使われていたのです。松ヶ岡には朝廷儒者の伏原宣明（一七九〇～一八六三）が書いた「以善堂」の扁額がありますが、歴代当主の書斎に掛けられていたのかもしれません。

二、「以善」の意味

さて、「以善」はどんな意味なのか、善をもってどうあるべきだというのでしょうか。おそらく儒学の経典に出典があると考えられます。

諸橋轍次著『中国古典名言事典』（講談社学術文庫）で「以善」またはそれに近い語が含まれる言葉は、①『孟子』公孫丑上の「楽下取二於人一以為上レ善」②『孟子』滕文公上の「教レ人以レ善、謂二之忠一」③『孟子』離婁下の「以レ善服レ人者、未レ有二能服レ人者一也。以レ善養レ人、然後能服二天下一」④『大学』伝十章の「善以為レ宝」⑤『小学』外篇嘉言の「勿下以二悪小一而為上レ之、勿下以二善小一而不上レ為」⑥『荀子』修身篇の「以レ善先レ人者、謂二之教一」―の五つを見出すことができました（同書収載順）。

出典の候補として、それぞれの書き下し文と現代語訳を挙げました。○の個所は筆者の感想です。

ア、『孟子』「楽下取二於人一**以**為上レ**善**」

『孟子』は『論語』『大学』『中庸』とともに四書の一つに数えられ、性善説を唱えていることでも有名です。江戸時代の儒学に大きな影響を与えた朱熹や王陽明も『孟子』を重んじました。山崎晨園の書いた扁額の「義人之正路也」と「夫仁者天之尊爵也人之安宅也」は、ともに『孟子』に出てくる言葉で、晨園が『孟子』に親しんでいたことがうかがえます。

まず、「楽下取二於人一**以**為上レ**善**」ですが、この条ではこの後にも「以為善」が出てきますので、書き下し文と現代語訳は岩波文庫版から当該個所の全文を引用します（カッコ内は振り仮名）。

【書き下し文】孟子曰く、子路（しろ）は人之に告ぐるに其の過（あやま）ちを以てすれば、則ち喜べり。禹（う）は善言を聞けば、則ち拝せり。大舜（たいしゅん）は焉（こ）れより大なるもの有り。善（よ）きこと人と同じければ、己（おのれ）を舎（す）てて人に従い、**人に取りて以て善を為（な）すを楽しめり。**耕稼陶漁（こうかとうぎょ）より、以て帝（てんし）と為（な）るに至るまで、人に取るに非（あら）ざる者なかりき。**諸（これ）を人に取りて以て善を為すは、是れ人と〔共に〕善を為す者なり。**故に君子は人と〔共に〕善を為すより大なるはなし。

【現代語訳】孟子がいわれた。「孔子の門人子路は自分の気づかぬ過ちを忠告されるとたいへん悦んだ。また聖人といわれた夏の禹王は他人から善いことばをきくと、〔尊い身分をも忘れて〕思わず『ありがとう』と頭を下げられた〔ということだ〕。ところが、帝舜になるとこの二人よりもいっそう偉大であった。善いことなら、自分だけではなく人々といっしょに行なうので、もしも他人に善いことがあれば、ドンドン取り入れてはすぐさま実行にうつした。**こうして他人の善を学びとっては、人々といっしょに実行するのを楽しんだのである。**歴山（れきざん）で農業をしたり、黄河の辺りで陶器をつくったり、雷沢（らいたく）で漁業をしていたときから、〔後に帝堯（ぎょう）の譲りを受けて〕遂に天子となってからも、いつでもそうされたのである。**かように他人の善を学びとってはすぐ実行にうつすのは、つまり人々といっしょに善を行なうというもの。**だから、君子の徳としてこ

れより偉大なことはないのである」。
○誤りを指摘されれば素直に受け入れたり、善い言葉を喜ぶことも大切だが、他人の善行を学びまわりの人も巻き込んで実行することが最も偉大だと言っています。

イ、『孟子』「教レ人以レ善、謂二之忠一」

これも前後がありますから、岩波文庫版から書き下し文と現代語訳を引用します。

【書き下し文】人に分つに財を以てする、之を恵（けい）と謂（い）い、**人に教うるに善を以てする、之れを忠と謂い**、天下の為に人を得る、之を仁と謂う。

【現代語訳】人に財物をやることを恵といい、人に善を教えることを忠といい、天下のために立派な人材を得ることを仁といい、〔これら三つの中で、最も尊くて難しいのが仁である。〕

○「教レ人以レ善、謂二之忠一」は、人材を得ることの大切さを強調する文脈で使われているので、「以善堂」の出典とは見なし難いように思います。

ウ、『孟子』「以レ善服レ人者、未レ有二能服レ人者一也。以レ善養レ人、然後能服二天下一」

以下は『中国古典名言事典』からの引用です。

【書き下し文】**善を以て人を服する者は、未だ能く人を服する者あらざるなり。善を以て人を養い、然（しか）る後能く天下を服す。**

【現代語訳】**ことばや議論で「かくかくのものは善だから行え」といったところで、それで人を心服させることはできるものではない。実際に善行を積み、善政を行ない、十分に人を教養してこそ、はじめて人は心服するのである。**　（※文中の「教養してこそ」の個所は、岩波文庫版『孟子』では「教え導き感化してゆけば」と訳しています）

○口先だけでは人はついてこない。率先して実行し、さらに丁寧に教え導くことで、初めて人はついてくる、ということでしょう。山本五十六海軍大将の「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人

は動かじ」という有名な言葉は、『孟子』のこの個所が出典かもしれません。

エ、『大学』「〈楚書曰、楚国無二以為一レ宝、惟〉**善以**為レ宝」

『大学』は「天下国家の政治もその根本は一身の修養にあることを説く」（岩波文庫『大学・中庸』表紙の文）とされ、薪を背負った二宮金次郎の像が読んでいるのも『大学』です。松ヶ岡には儒学や詩文に優れた公卿日野資愛（一七八〇～一八四六）が「善宝」と書いた扁額がありますが、『大学』のこの個所が出典だと思われます。

『中国古典名言事典』の書き下し文、現代語訳は次の通り。

【書き下し文】**善以て宝と為す。**

【現代語訳】楚の国史によれば、**楚国においてはとりわけ宝とするものはほかにない。もしありとすればそれはただ善人がいるということだけだ、**とある。

○岩波文庫版『大学・中庸』ではこの個所に注して、楚が晋から白玉の装身具のことを聞かれると、重臣は「（白玉を）宝となさず。楚の宝とする所は観射父（という賢人）である」と答えたという『国語』楚語の話を紹介しています。

豊臣秀吉が有力大名を集めてそれぞれの自慢の宝物を尋ねたとき、徳川家康が「田舎大名なので自慢するほどの宝物はありませんが、自分のためには命を捨てるのもいとわない五百騎ばかりの家臣がいます」と答えたという逸話が思い起こされます。

オ、『小学』「勿下以二悪小一而為上レ之、勿下**以二善小一而不上レ為**」

『小学』は儒学の初学者のため、朱子の指導の下に門人の劉子澄が編纂したものです。晨園も当然、『小学』を学び親しんだことでしょう。『中国古典名言事典』には次のようにあります。

【書き下し文】**悪小なるを以て之（こ）れを為（な）すこと勿（なか）れ、善小なるを以て為さざること勿れ。**

【現代語訳】**たとえ小さい悪事でも、悪事はいっさいしてはならない。善事**

は小さいからといって、これをやらずにおくことはいけない。

○さらに意訳すれば、「悪いとわかっていたなら、どんな些細なことでもしてはいけない。善いことはどんな小さなことでも、面倒くさがったり恥ずかしがったりしないで実行すべきである」ということになるでしょう。簡単なようでいてなかなか難しいことです。

この言葉は、もとは正史『三国志』にあります。蜀漢の皇帝劉備が臨終に当たり、息子で後継者の劉禅に残した言葉です。劉禅は結局、魏に降伏して蜀を滅亡させてしまいました。

カ、『荀子』「**以**レ**善**先レ人者、謂二之教一」

『孟子』の性善説に対し、性悪説で有名な『荀子』です。「以善先人者、謂之教」には長い続きがありますが、善・不善に関する個所を『新釈漢文大系』（明治書院）の『荀子』から書き下し文と現代語訳を引用します。

【書き下し文】善を以て人に先（さきだ）つ者は、之（これ）を教と謂（い）ひ、善を以て人に和する者は、之を順と謂ひ、不善を以て人に先つ者は、之を諂（かん）と謂ひ、不善を以て人に和する者は、之を諛（ゆ）と謂ふ。

【現代語訳】人の先に立って善を唱え行なうのを教と言い、人に賛成し協和して善を己も唱え行なうのを順と言い、これに反して、人に先だち導いて不善を行なうのを人を悪におとしいれると言い、人の行ないに和して不善を行なうのを人にへつらうという。

○晨園がとくに『荀子』に親しんだという徴証はありませんが、参考までに挙げておきました。

キ、結論

晨園が孟子の言葉を扁額に記していることから、『孟子』のア、ウのどちらかが出典の可能性が高いでしょう。また、『小学』は晨園も幼い頃に親しんだはずで、子弟の教育のためにも『小学』から採ったと考えれば、オも捨てがたく思います。

『中国古典名言事典』には載っていない言葉が出典かもしれず、結論を出すことはできませんでした。しかし、いずれの言葉も簡単そうでいて実

践は難しいことばかりであり、「以善堂」と名付けた晨園の心構えを感じ取ることができるのではないでしょうか。

三、「善」とは

儒学の古典などには、善とは何かを突き詰めて検討したものはないようです。ここでは、孟子が性善説を論証するために説いているくだり（『孟子』公孫丑上）を、金谷治著『孟子』（岩波新書）から紹介します。

今、よちよち歩きの幼児が井戸に落ちこもうとしているのを見つけたとする。だれでもじっとしておれない同情心にかられて駆けだすにちがいない。それは幼児の親と交際したいからではなく、村の仲間にほめられたいからでもなく、助けなかった場合の非難を恐れてそうしたのでもない。まったくの自然である。このことから類推すると、このじっとしておれない同情心がない者は人間ではない。羞恥心のない者も人間ではない。謙譲心のない者も人間ではない。善悪の分別心のない者も人間ではない。（後略）

「じっとおれない同情心」は、『孟子』原文では「不忍人之心」（人に忍びざるの心）という有名な言葉です。人はだれでも「人に忍びざるの心」などをもっているので、人間の性質は本来、善であるということでしょう。

四、「以善堂」の扁額

松ヶ岡にある「少納言清原宣明」筆の「以善堂」の扁額についてみてみましょう。清原宣明の清原は藤原、源などと同じく本姓で、伏原宣明のことです。伏原家は代々明経博士に任じられ天皇家や公家に儒学を講じる儒家で、正二位に昇る公家でもあります。

宣明も儒学を講じたのですが、堀河康親の二男周丸（後の岩倉具視）は僧侶になるはずだったところ、宣明がその優れた能力を見抜いて岩倉家の養子となったというエピソードがあります。『岩倉公実記』の当該個所を現代語訳して紹介します。

岩倉具視は周丸と名乗っていた幼いとき、伏原宣明に入門して学んだ。『春秋左伝』の輪講のときに学生たちは皆、書物を持って講堂に集まったが、周丸はまだ寮にいて、出席しようとする友人を引き留め、将棋の駒を懐から出して「勝負しよう」と誘った。

友人が「君は無用の遊びをしようというのか、なぜ学問に励もうとしないのか」となじると、周丸は笑って「『春秋』の大意はもう理解している。一言一句を穿鑿して無用の労力を費やすより、将棋で知略を磨いた方がいい」と答えた。

宣明はこれを聞いて、周丸はすごい麒麟児（優れた少年）だと感じ、天保八年（一八三七）に岩倉具慶宅に赴き「あなたはまだお子さんがいらっしゃいませんので養子を考えていることでしょう。堀河周丸という十三、四歳の童子がいますが、その挙動は普通の子供と異なっていて、成長したら有用の人物となります。この子を養子とすれば岩倉家は大いに繁栄するでしょう」と勧めた。

具慶と宣明はふだんから仲が良かったが、宣明のアドバイスを受け入れた具慶は堀河康親のもとに行って周丸を養子にしたいと申し入れた。周丸は既に尊超親王の稚児となる約束だったので、康親は「少し考えさせてくれ」と答えた。翌年になって具慶が再び康親に申し入れると、康親は周丸を具慶の養子にすることを承諾した。

宣明のアドバイスがなければ周丸は尊超親王の弟子の僧になっていて、幕末維新期の英雄岩倉具視は現れなかったことになります。

また、宣明は晩年、祐宮（後の明治天皇）の読書師範を勤めました。『明治天皇紀』によると、初めて祐宮に読書指導したのは安政六年（一八五九）で祐宮八歳、宣明七十歳（年齢は数え）でした。このとき宣明は『孝経』の一節を三度読んで解説しました。その後『大学』『中庸』『論語』も講義しています。宣明の死（一八六三年）後は息子の宣諭が『論語』などを講じました。

宣明が扁額の文字を書いたのは少納言のときで、宣明が少納言だったの

は文化三年（一八〇六）から明経博士になる文政二年（一八一九）までですから、この頃はまだ儒学の大家だったわけではありません。しかし伏原家は代々の朝廷儒者であり、宣明もそのうちに明経博士として儒学を講じることになるはずです。晨園が何らかの伝手を頼って宣明に「以善堂」と書いてもらったのは、若き儒者として宣明の名声が関係者の間で既に知られていたからかもしれません。

明治十一年（一八七八）の行幸で明治天皇が松ヶ岡に泊まったとき、「以善堂」の扁額が掛かっていたとしたら、天皇は思いがけない場所で幼い頃の恩師の名前を見つけて、いっとき感慨にふけったことでしょう。

（了）